

1

ウ  
2  
古代  
3  
歴史

3  
I  
エ  
II  
ア  
III  
イ  
4  
イ  
5  
多様性

6  
イ  
↓  
エ  
↓  
ウ  
↓  
ア

7  
自分の  
いる人  
8  
(記述題)

9  
これは  
10  
A  
な  
B  
も  
C  
い

11  
a  
栄  
えた  
b  
結果  
c  
置き

2

1  
a  
信号  
b  
勝手  
c  
横

2  
A  
高  
B  
われ  
c  
血  
3  
いつも

4  
I  
エ  
II  
ア  
III  
ウ  
5  
(記述題)

6  
そして、  
ピ  
7  
ウ  
エ

8  
全国大会  
9  
ア  
10  
ウ  
(7  
順不同)

配点	
1 10・11 2 1・2	各2点×12=24点
1 8 2 5	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

1

8  
周囲と合わせ、空気を読む

(同意可)

2

5  
平気なふりをすれば大会に出られると  
思ったから。

(同意可)

- 1 線①の後続部分から、「日本が島国であること」と「世界に類のない歴史を刻んできたこと」が「正しい」側にいたがる。「国民性」を作り出してきたことがわかる。「島国という地理的条件、そして長く続いた特殊な歴史」によって「均質で同一の価値観を有する社会」になり、「暗黙のうちに理解し合い」「空気を読む」ようになっていったのである。
- 2 通読時には常に「何の話をしているのか」「何について書かれているのか」という意識をもたなくてはならない。本文の★までは「日本」について述べられているのはわかっただろうか。その中で日本が持つ「世界に類のない歴史」についてくわしく説明されていた。
- 3 それぞれの接続語がどういう働きを持つのかをきちんと確認しておこう。
- 4 「ケツカ的に」という言葉から、おそらくここより前が関係しているだろうという見当をつけてほしい。「島国の住人は元と清からいず」という部分から、外国との交流がない状態をイメージできただろうか。
- 5 支配階級や社会の構造が大きく変わることがなかった日本の歴史を「世界に類のない」「特殊」といつているのである。そのような歴史を持っている日本は「均質で同一の価値観を有する社会」が基本となった。「多様性から最も遠い文化」を作っていたのである。★から☆まででは日本とそれ以外の国が対比的に説明されているので、日本以外の国は「均質で同一の価値観」にはならず、「多様性」のある文化を持つようになったと考えられる。

- 6 エ「同一性を強制されることは少なくなってきた」↓ウ「それでも、価値観は共有されてきた」↓ア「けれども同一性社会の中の個が、次第にブラウン活動をはじめた」という流れが見えただろうか。接続語や指示語などがあればそれに注目して考えることも必要だが、そもそも文のつながりを考えることが大切である。
- 7 線④の直前の行に「アイデンティティーを極めたいと自我に目覚めた人が増えたこと」で、空気が乱れ始めた」とあるが、ここだと字数の条件に合わないので、「アイデンティティーを極めたいと自我に目覚めた人」の同意表現を探そう。
- 8 日本人が持つ潜在意識を考えればよい。「同一性社会」が日本の社会なのだから、そこに生きる日本人も周囲と合わせよう、空気を読もうとするのである。
- 9 本文三行め以降は、氣質がそなわっている原因が話題になっていることから、本文のはじめの方に書かれているのではという見当をつけてほしい。あとは「いわゆる」や「氣質」の言葉の意味から判断できるだろう。
- 10 畳語と呼ばれる言葉である。こういった言葉も意識して自分の知識にしていくようにしよう。

- 11 a「栄」は「ツ」のように左から書くように気をつけよう。b「結果」は非常によく出てくる言葉である。確実に覚えてほしい。c「置」の七画めと八画めをきちんと分けて書こう。

- 2 a「号」の五画めを四画めより上から書き出さないようにしよう。b「勝」の右下の部分は「刀」ではなく「力」である。c「横」十一画めはきちんと上につきだすように書こう。

- 2 A「胸が高鳴る」は喜びや期待などで胸がどきどきすること。B「われに返る」は正気づくこと。C「(目が)血走る」は興奮や熱中のあまり、目が充血して赤くなること。どれもよく見る表現であった。普段の学習時から、意味をイメージできないものに出会った時にはその都度調べていく姿勢が大切である。

- 3 楽しみにしていたのだから、早くその日をむかえたいのである。様子や状況をイメージできたか。
- 4 なんとなくの雰囲気ではめるのではなく、空らん前後をきちんと確認して入れていこう。(Ⅲ)で少々悩んだかもしれないが、自分といっしょに病院へ行くと言ってくれている一人に申し訳なきを感じ、なみだを流す直前であることから答えが決まる。

- 5 救急車をよんでほしくないということは病院に行きたくないということだろう。ここより後の玲とのやりとりからその理由は判明する。

- 6 逃げようとしているときにつかまえられそうになって全力でふりはらった大和と対照的な様子なのだから、あきらめて病院へ行くことを受け入れている様子をイメージしてほしい。「比喻」にも当然気をつけなくてはならない。

- 7 線④の後で、太一監督が、試合に行くという大和を止め、試合よりも自分の体のことを考えるよう論じている。ここから答えは決められるだろう。

- 8 ここでの「行く」は「移動する」といった意味でなく、「出場する(ことをめざす)」という意味である。

- 9 ここでの状況を正しくイメージしてほしい。けがをしている以上試合に行くことは当然無理で、常識的に考えて病院に行く以外の選択はないにもかかわらず、病院に行こうとしない大和をそのままにはしておけないので監督や空良、玲がここから動けないのである。

- 10 「試合には行かない」という言葉を聞いて「瞳が、一瞬ゆれた」というところや「声をしぼりだすように」というところから、試合への未練がないわけではないということがわかる。しかし、それでも病院へ行くということは試合よりもチームメイトである大和のことを考えているのである。

以上